

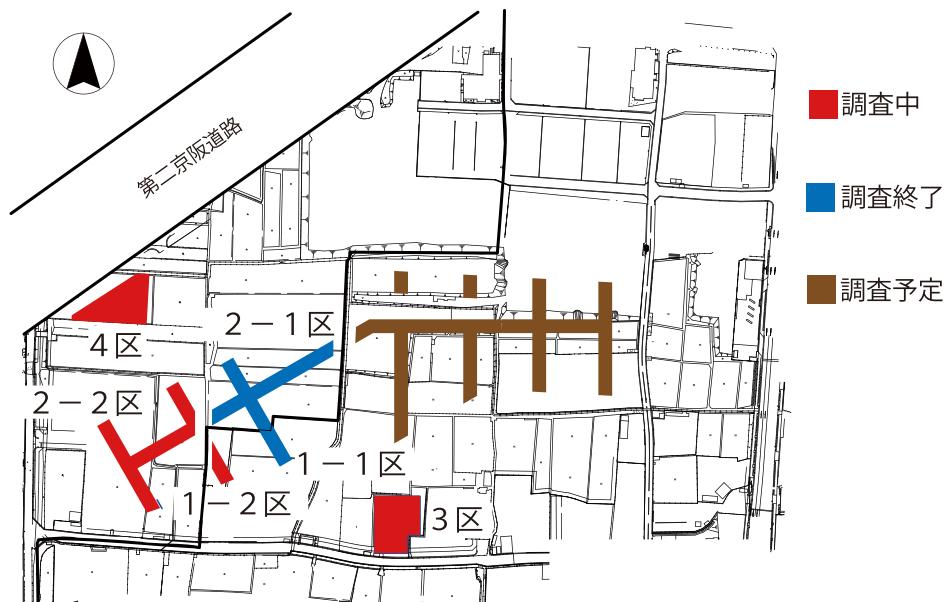
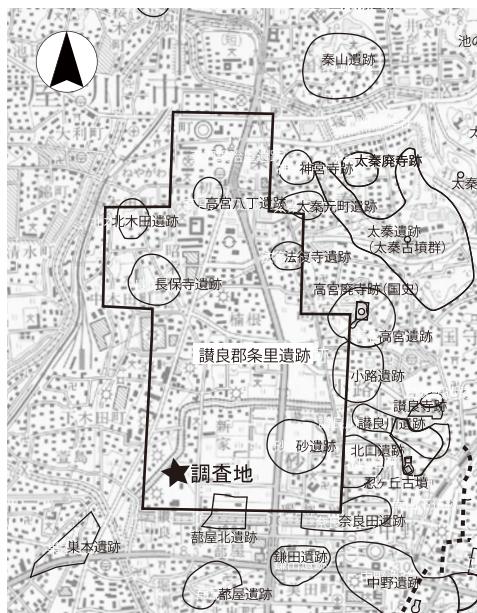
讚良郡条里遺跡 現地説明会資料

平成 24 年 3 月 24 日 (土)



位置と環境

讚良郡条里遺跡は、寝屋川市南部から四條畷市にかけて広がっている遺跡です。条里は古代に設定された水田の区画で、この地域では一辺約 109m の区画がほぼ南北方向に並んでいるのが残っており、現在も水田の畔をはじめ道路や水路にその痕跡が認められます。また、遺跡内では、寝屋川市高宮八丁遺跡（弥生時代）・長保寺遺跡（古墳～鎌倉時代）、四條畷市部屋北遺跡（古墳時代）などの各時代の集落遺跡も見つかっています。今回の調査地は、寝屋川市新家 2 丁目及び四條畷市砂にまたがる区域で、古墳時代の馬飼集団の遺跡として有名となった部屋北遺跡と、弥生時代以降の各時代の遺跡が見つかった第二京阪道路建設に伴う調査地の間に位置します。これまでの調査成果より、古代の水田以外に弥生時代や古墳時代の集落遺跡の広がりが想定された地域で、昨年（平成23年）8月より、寝屋川市教育委員会・四條畷市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センターの共同による発掘調査を進めています。



中世のくらし

3区では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡がみつかっています。現時点で、鎌倉時代の後半（約700年前）の生活面と、平安時代から鎌倉時代初め（約900年前）の生活面を確認しています。鎌倉時代後半には、調査区の北側の低い土地を畑として使い、南側のやや高い土地に人々が暮らしていましたことがわかりました。この面では曲物井戸などのほか、建物を構成すると考えられる柱跡がみつかっています。主な出土遺物としては、中国製青磁・白磁、瓦器・土師質土器・須恵器・瓦などがあります。



平安時代（約900年前）には、調査区のほぼ中央を東西に川が流れ、その南側に人々が暮らしていた状況を知ることができました。この面では当時の方形板枠井戸・曲物井戸や建物の柱跡などがみつかっています。また、宋銭4枚ほどが、紐につなげられていたと考えられる状態でみつかりました。川より北側にある溝からは、当時の皿が集中してみつかるとともに、皇朝十二銭のうち11番目に作られたもので、907年に作られ始めた延喜通宝8枚が紐につなげられていたと考えられる状態でみつかり、祭祀を行ったものと考えられます。ほかに主な出土遺物としては、緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・土師質土器・黒色土器・須恵器・瓦などがあります。



古代の水田

調査地の中央部のやや東寄りの場所で、東西方向の坪境の大畦畔が1条みつかりました。それを挟んで、長地型の水田が広がっていました。一面に、人や牛の足跡が多数みつかっています。



古墳時代のくらし

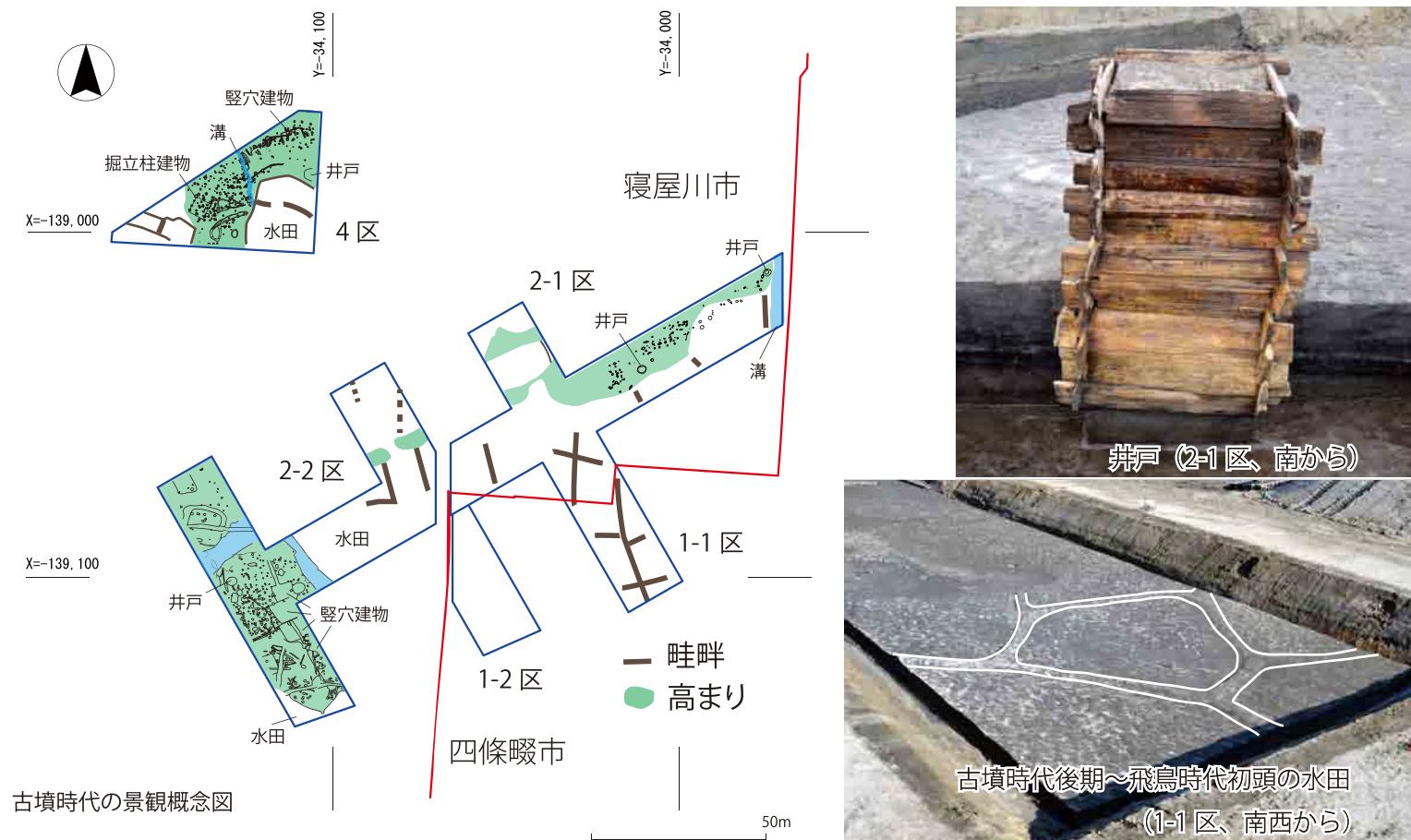
古墳時代中期～飛鳥時代初頭（約1600～1400年前）にかけての集落と水田がみつかりました。

集落の中には、当時の人々が暮らしていた竪穴建物や掘立柱建物があり、周辺で井戸や溝もみつかっています。溝からは、大量の土器とともに、槽（そう）や琴、剣形木製品、斎串（いぐし）などの木製品を出土しました。

水田は、古墳時代中期と古墳時代後期～飛鳥時代初頭のものがそれぞれみつかっています。地形を上手に利用して畦畔（けいはん）を設け、すみずみに水が行きわたるように工夫してありました。

注目されるのは、古墳時代中期初頭の水田の区画が、後期の水田にくらべるとおおきいことです。弥生時代のデコボコした地形が泥層で埋まって平坦となり、細かく区切る必要がなかったためと考えています。

出土した土器の中には、韓式系土器と呼ばれる朝鮮半島の影響を受けたものが多くあります。豊かな生活をうかがわせる古墳時代の人々は、渡来人との交流もあったのでしょうか。





溝から出土した土器と木製品（南東から）



馬の歯



古墳時代中期初頭の溝
(1-1・2-1区、東から)



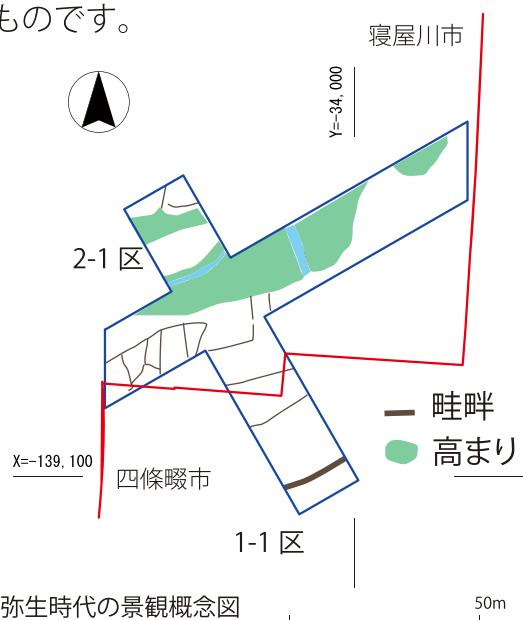
古墳時代中期初頭の水田(1-1・2-1区、東から)

弥生時代のくらし

弥生の水田

古墳時代の集落や水田の下からは、弥生時代中期中葉～後葉（約2100～2000年前）の高まりと水田がみつかりました。

古墳時代にもあった高まりは、洪水砂をかき集めて造成されたもので、帯状に南西方向に伸びていました。高まりの上には、農業用の水路が掘り込まれており、周辺の水田に水を供給していたようです。この高まりの周辺には、小区画の水田が広がっており、古墳時代にみつかった水田の原型となるものです。



畦畔の検出状況 (1-1区、東から)



弥生時代中期前葉の水田
(2-1区、北東から)

大きい畦畔と小さい畦畔

弥生時代中期中葉以前にこの地を襲った洪水砂の掘削を進めると、再び、水田畦畔があらわれました。出土した土器から、弥生時代中期前葉の水田と考えられます。

北西方向に低くなる地形を利用して、高低差が変化する部分に大きな畦畔を設けていました。大きい畦畔の間は、小さい畦畔で区画しており、階段のように段差を付けて水を回していました。



畦畔の検出状況 (2-1区、北から)

弥生時代の集落

調査地南端部の南側から続く高まり上で、弥生時代中期前葉（約2400年前）の集落の縁辺がみつかりました。土坑・井戸や溝などがあり、それらから、壺や甕などが出土しています。また、その中には木製品や石器も含まれました。

高まり部分に住み、周辺の低い部分では水田耕作を行っていたことがわかりました。



弥生時代中期前葉の集落（1-1 区、東から）



弥生時代前期後葉の水田（1-1 区、南から）

小さい区画の水田

弥生時代中期前葉の集落の下にあった洪水砂を掘削すると、弥生時代前期後葉（約2500年前）以降の水田がみつかりました。整然と並ぶ小区画の水田が良好に残っているところもありました。一部の大畦畔は、弥生時代中期初頭の水田と同じ位置でみつかりました。洪水砂が運ばれたところを中心として、災害からの復旧を行い、運ばれなかったところは、そのまま同じ位置で利用されたようです。

弥生時代前期の土木工事

弥生時代の前期中葉～後葉（約2700～2500年前）の高まりがみつかりました。この高まりは、もともと周辺より高かったところに、さらに土を盛り上げて、人工的に造成してきたものです。高まりの上には、溝が1条掘削されていました。溝底の高さや高まり周辺の地形から、北西方向に流れていたと考えられます。

水田開発が一つの契機となって、このような土木工事が行われた可能性があります。



弥生時代前期中葉～後葉の高まり（2-1 区、南から）

出土品ザクザク

出土品には、弥生時代から中世を中心に、さまざまな素材を使ったモノがありました。中でも、滑石という石材を用いて作った古墳時代の石製品は、総点数4000点を超えます。

石製品には、子持勾玉（こもちまがたま）、勾玉、管玉、双孔円板、臼玉などがあります。子持勾玉は、勾玉状の小突起が付いており、通常の勾玉と大きく違います。

また、出土した石製品をよくみていくと、滑石の原石や作りかけの紡錘車も含まれることがわかつてきました。古墳時代の集落の一角で、これらの石製品を作っていた工房があった可能性があります。集落の住人が玉作りにたずさわっていたのでしょうか。



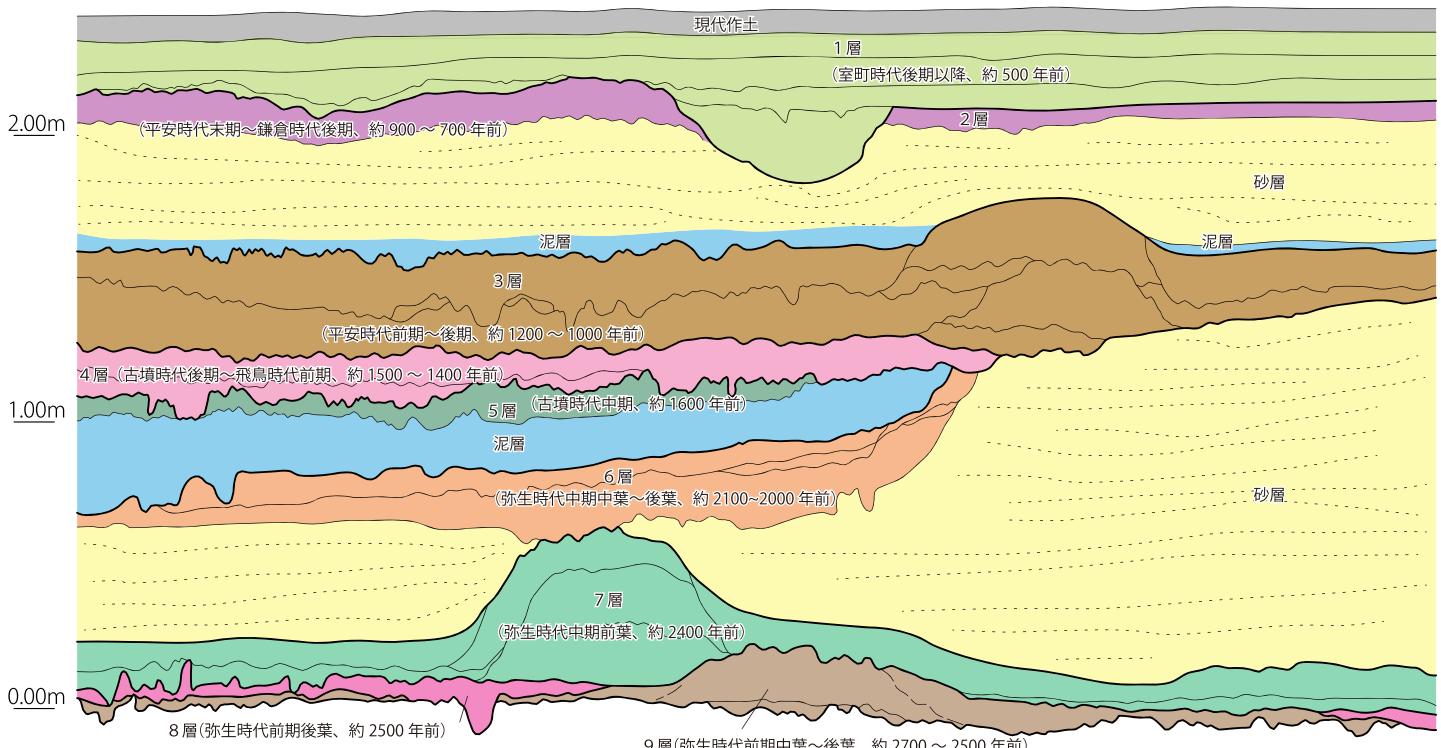
まとめ

今回の発掘調査で、弥生時代前期から中世に至る水田の移りわりと古墳・弥生時代の集落の一部が明らかとなりました。

古墳時代では、豊穴建物や掘立柱建物のある居住域と低いところを利用して米作りを行った生産域の広がりが確認できました。讃良郡条里遺跡に隣接する部屋北遺跡には、同じ時期の大規模な集落があり、従来、「馬飼（うまかい）集団」の存在が指摘されてきました。今回の調査でみつかった水田は、古墳時代の人々に、米作りを行う新たな一面もあることを示すものとなるでしょう。

一方、弥生時代では、長期にわたる水田経営と集落の一部を明らかにすることができました。第二京阪道路建設に伴って行われた発掘調査では、近畿最古の弥生土器が出土しています。本格的な弥生時代の始まりに、当時の先進的な土地柄にある讃良郡条里遺跡で、今後、米作りの歴史がどこまで遡るのか興味はつきません。

引き続き、讃良郡条里遺跡では発掘調査を行っています。今後、新たにわかつたことは、またの機会に皆様にご紹介します。



模式断面図（2-2 区）